



**香港政治危機**  
 圧力と抵抗の2010年代  
 倉田徹・著  
 東京大学出版会 / 3520円

## 自由都市の終焉 香港はどこへ行くのか

かつて、政治色の薄い国際金融センターとして繁栄してきたはずの香港は、なぜここ十数年あまりで急激に「政治化」したのか——。本誌をはじめさまざまな媒体で変貌してゆく香港の現状を分析し続けてきた著者は、北京の中央政府や香港市民、国際社会といったアクターの変化を読み解くとともに、香港問題は、「中国式」がシャープパワーとしてどれほど世界に影響を及ぼし得るかの試金石となることを示唆する。

タリバン指導者のムッラーウマルは9・11を悔いていた。テロ首謀者ビンラディンの保護で知られる彼が、組織内の過激派の排除に動いていた——。ひとりの外交官がタリバンからアフガニスタン政界、実業界まで張りめぐらせた網にかかったさまざまな情報。研究者から外交官に転じ、一貫してアフガニスタンに寄り添った著者はそれらの情報から歴史の裏側の人々の悲しみと喜び、和平への努力と挫折をたどり、そして希望を見出す。

## 情報の海からすくい取る アフガン現代史の裏側



**破綻の戦略**  
 私のアフガニスタン現代史  
 高橋博史・著  
 白水社 / 2090円

## 膨張する任務と権限 越境する 国家の統治性



**膨張する安全保障**  
 冷戦終結後の国連安全保障理事会と人道的統治  
 上野友也・著  
 明石書店 / 4950円

現代の「安全保障」は、国家の安全への保障だけでなく、人間の生命と安全までも射程とする。グローバルな現在では、紛争地域の諸問題が国連安全保障常任理事国（「五大国」）の利害に関わる。ゆえに大国は領域外の「人口」管理に関心をもち、しばしば国家の統治性が国境を越えて適用される（人道的統治）。本書は理論と事例分析から、冷戦後の安保理が自らの決議に基づいて、その任務と権限を拡大させてきたことを明らかにする。



**帝国とヨーロッパのあいだで**  
イギリス外交の変容と英仏協商 1900-1905年  
谷一巳・著  
勁草書房 / 6270円

## ライバルから同盟国へ 英仏協商はなぜ実現したか

対立する関係をいかに改善させるか——これはいつの時代の外交にとっても、普遍的な課題だろう。数世紀にわたって対立を繰り広げていた英仏は、二〇世紀初頭のわずか数年間で、実質的な同盟関係へと進化した。本書は英外相フランス・ダウンの手腕に着目して、英仏が急速に関係を改善し、協商締結に至る道程を描写する。著者の美しい筆致は、英国の覇権が動揺する中で、フランス・ダウンが抱えた苦悩を追体験させてくれる。

意図的に歴史的事実を歪曲しようとする歴史修正主義が、いま世界で広がっている。根拠に乏しく、複雑な背景を無視して単純化された「真実」を、なぜ人は信じてしまうのか。著者は歴史学者として無視も論破もせず、過去への贖罪を抱え込まざるを得なかった戦後ドイツを中心に、一〇〇年以上続く欧米の歴史修正主義を正面から跡付けることにより、歴史とは何かを考え、国民国家が歴史を拘束することの意味をも照射する。

## 歴史修正主義

ヒトラー賛美、ホロコースト肯定論から法規制まで  
武井彩佳・著  
中公新書 / 924円



## 歴史認識は果たして 法規制できるか

投票率の低下、ポピュリズムの浸透——近年、「民主主義の後退」が議論される中で、選挙の脆弱性が指摘されている。著者は、選挙は集団的決定のメカニズムであり、異なる価値観を持つ人々が規則に従い平和的に争いを調整し、解決する場であると強調する。選挙に限界があることについて多く言及した上で、一部の人が富が集まり、分断・格差が広がる現実において、選挙が果たすことのできる役割を考え直す。

## それでも選挙に行く理由 集団的決定のメカニズム

アダム・フシェヴォスキ・著  
粕谷祐子 / 山田安珠・訳  
白水社 / 2090円

